岩手日報　2024年（令和6年）10月26日（土曜日）

がん患者支える社会へ

ステージ4と闘病 医師・熊坂義裕さん（宮古）

孤立、不安、家族の葛藤―

自身の体験、提言一冊に

著書を手に「日本はがん治療や研究は進んでいるが、患者や家族への支援が十分ではない」と提言する熊坂義裕さん＝25日、盛岡市内丸

がんと向き合い、安心して生きられるように―。医師で元宮古市長の熊坂義裕さん(72)は、ステージ4の前立腺がんの闘病体験を踏まえ、患者への支援の重要性を訴えている。病を得て見えたのは、今後への強い不安、家族の葛藤など、違う景色。治療研究は進んでいるのに、当事者や周囲へのサポートが少ない現状に危機感を抱き、本を執筆した。がんとの暮らしを社会で支える「がんサバイバーシップ」の概念が広がるよう、思いを込めた。

きっかけは糖尿病検査だった。同市和見町の大久保・熊坂内科医院顧問の熊坂さんは昨年11月、がんが判明。転移も認められ、ステージ4と診断された。内分泌治療やロボット手術を受け「まわりを不安にさせないように平然を装ったが、あとどのくらい生きられるか強い不安に襲われた」。

家族は、それ以上にショックを受けていた。妻伸子さん(72)は「心がまるでジェットコースターに乗っているようで、心細さで泣きそうになった」と振り返る。

国立がん研究センターの統計によると、日本人のがん罹患数推計値（2021年）は約101万人。生涯の中で2人に1人が何らかのがんになるとされる。

熊坂さんは闘病を通じて、治療中、治療後の当事者と家族が置かれている状況に違和感を持った。自身は医師だからこそ、情報が得られ、人脈もある。だが、一般の人々は病気について十分な情報を得るのは簡単ではなく、再発の恐怖や就労、病気への偏見、恋愛などの悩みを周囲に相談もできず孤立している―。

そんな思いでまとめた著書「がんと折り合いをつけて生きる」は前半に、自身や親族らの闘病体験、家族らの手記を掲載。診断方法や種類、症状、進行具合による治療法も記した。

問題提起のため、NPO法人日本がんサバイバーシップネットワークの高橋都代表理事＝宮古市出身＝と伸子さんを交えた鼎談も盛り込んだ。高橋代表理事がアドバイザーを務める「がん在宅緩和ケア支援センター・ういケアみなと（東京）」を引き合いに、悩みを相談でき、支援制度も知ることができる施設が全国に設置されるよう提言している。

県対がん協会の村上晶彦専務理事との鼎談も記載。新型コロナウイルス禍を機に検診の受診者が減り、ステージが進行した状態でがんが判明する例が増えている現状に警鐘を鳴らす。

「当事者や家族をサポートする態勢が日本ではまだ不十分で、早急な対策が求められる」と熊坂さん。「がんを必要以上に恐れず、折り合いをつけながら前向きに生きることができる社会になってほしい」と切望する。

◇　◇

「がんと折り合いをつけて生きる」は、岩手日報社出版で、四六判280ページ。1540円。11月2日から県内の書店、岩手日報販売センターで販売する。

熊坂義裕さんのインタビュー動画はこちら